Osaka University Knowledge Archive

Title	本学看護学生の日常生活の実態調査 : 看護教育の視点からの分析
Author(s)	田中, 結華; 久米, 弥寿子; 辻, 聡子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 1997, 3(1), p. 43-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56854
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

本学看護学生の日常生活の実態調査

― 看護教育の視点からの分析 ―

田 中 結 華*・久 米 弥寿子*・辻 聡 子*

A SURVEY OF DAILY LIVING ACTIVITIES OF NURSING STUDENTS

―AN ANALYSIS FOR NURSING EDUCATION―

Y. Tanaka, Y. Kume, S. Tsuji

Ⅰ はじめに

基礎看護技術では、学生が日常生活上の経験で培った知識や技術を生活援助技術教育に効果的に反映させることが可能である。また、専門基礎科目で得た知識を十分に用い、学生自身の健康上の問題について認識することを通して、患者に対する生活状況を判断・援助する力を養うことができると考えている。そこで、学生の日常生活経験、健康観、看護を志向した動機等の実態を知り、看護基礎教育の展開を検討する一助にしたいと考えた。今回、保健学科看護学専攻1期生を対象にこれらの実態について調査を行ったのでここに報告する。

Ⅱ 方 法

1．調査対象及び調査時期

対象者は、大阪大学医学部保健学科看護学専攻1期生75名である。調査時期は基礎看護技術論の開始前である、2年次後期の1995年10月に行った。

2．調査方法及び調査内容

方法は、質問紙を配布し、1週間後に回収した。内容は、先行文献[1)~6)]を参考にして以下のように作成した。

1）基本的属性：性別、年齢、高校まで同居していた家族、高校時代と現在の住居

2）高校時代と大学時代の食事準備に関する事項、洗濯に関する事項、寝具の手入れに関する事項、掃除に関する事項

3）健康観：高校時代と大学時代の食事摂取に関する事項、喫煙習慣、健康上気をつけている事項、体の事で気になる事項

4）看護を志向した動機

3．分析方法

生活習慣に関しては、各項目の実施頻度を「毎日している」「週に1～2回している」「月に1～2回している」「年に数回している」「全くしない」の5段階とし、順位付けた。分析は高校時代と大学入学後の変化、および住居で「実家」と答えた自宅生と「下宿・寮」と答えた自宅外生という区分（以下、住居区分）別等による比較を行い、項目毎に実施頻度を比較した。統計解析には統計ソフトSPSSを用い、検定はWilcoxonの符号付順位和検定、Mann-WhitneyのU検定およびχ^2検定を行った。

Ⅲ 結 果

対象者75名中、有効回答が得られたのは73名（97.3％）であった。

1．対象者の基本的属性（表1）

性別では女性が94.5％であり、平均年齢は20.0 ± 0.8歳であった。住居は、高校では自宅生が98.6％、自宅外生が1.4％であったが、大学では自宅生が39.7％と減少し、自宅外生が60.3％に増加した。また、三世代、四世代家族同居の経験者は39.7％であった。

＊大阪大学医学部保健学科

表1　対象者の属性

(n = 73)

項目	人数	(%)
性別		
女性	69	(94.5)
男性	4	(5.5)
年齢		
19-20歳	59	(83.1)
21-25歳	12	(16.9)
大学入学前の住居		
実家	72	(98.6)
下宿・寮等	1	(1.4)
大学入学後の住居		
実家	29	(39.7)
下宿・寮等	44	(60.3)
高校時代までに同居した家族		
一世代家族	1	(1.4)
二世代家族	42	(58.9)
三世代家族	29	(38.3)
四世代家族	1	(1.4)

2．生活習慣（表2）

1）高校時代の生活習慣

食事準備等（4項目）について週1～2回以上実施していた者の割合は、「配膳等食べる準備」は86.3％が最も多く、「後片付け」は64.4％、「買い物」は28.8％、「料理」は27.4％であった。食事準備等の4項目を全く実施していなかった者は、6名（うち女性4名）で8.2％であった。

洗濯について月1～2回以上実施していた者の割合は、「洗濯物を収納する」が72.5％、「たたむ」は68.5％、「干す」が61.6％、「洗濯機で洗う」は52.8％であった。洗濯に関して全項目を全く実施していなかった者は、17名（うち男性2名）で23.3％であった。

寝具の手入れについては、「シーツ交換」を月1～2回以上実施していた者は60.3％であった。

掃除は、月1～2回以上掃除していた者の割合を掃除の場所ごとに見ると、「自分の部屋」は86.8％、「家人の部屋」は52.1％、「トイレ」は最も少なく16.4％であった。どの部屋も全く実施しなかった者は女性1名（1.4％）であった。

2）大学での生活習慣

大学での生活習慣は、高校時代に比べ調査した16項目中15項目で実施頻度は増加しており、10項目で有意差（$p<0.01$）が見られた。

食事準備等（4項目）については住居区分では自宅生より自宅外生の実施頻度が高く、4項目全てに有意差が認められた。（$p<0.01$）。週1～2回以上実施している者は、自宅外生では、「買い物」と「料理」の項目が各々90.9％、「配膳等」と「後片付け」が各々100％であったが、自宅生は「買物」が44.8％、「料理」31.0％、「配膳等」が72.4％と各項目でばらつきが見られた。高校時代と比較して「食料品の買い物」「料理」「後片付け」の3項目で有意差が見られた（$p<0.01$）。自宅生に関しては、高校に比べて大学入学後、「配膳等」以外の実施頻度は高くなり、「買い物」や「料理」を週1～2回以上実施している者の割合が増加したが、有意差はなかった。

洗濯（5項目）については、自宅生より自宅外生の方が実施頻度が高く、「洗濯機で洗う」「干す」「たたむ」の各項目で有意差があった（$p<0.01$）。自宅生に関して「干す」と「収納」で月1～2回以上実施している者が高校時代と比較して大学で増加したが、有意差はなかった。洗濯に関して全く実施しなかった者は、男女1名ずつ（自宅生）で高校時代よりは減少した。

寝具の手入れは、「布団を干す」で自宅生より自宅外生の実施頻度が高く、有意差が認められた（$p<0.05$）。自宅生に関しては、高校から大学で各項目を月1～2回以上実施している者の割合が減少した。寝具の手入れを全くしない者は高校より減少して9名（全員自宅生で男性1名含む）であった。

掃除は、5項目の合計得点を住居区分別に見ると、「家人の部屋」の掃除以外で自宅外生は自宅生より高く、有意差が認められた（$p<0.01$）。自宅生は、「自分の部屋」や「風呂の掃除」を月1～2回以上実施している者の割合は増加していた。

3）生活習慣実施頻度の男女差

男女間で有意差が見られたのは、食事準備に関する項目で、高校での「配膳等食べる準備」（$p<0.05$）、「食料品の買い物」（$p<0.05$）「後片付け」（$p<0.01$）および、大学での「料理」（$p<0.05$）「後片づけ」（$p<0.05$）の各項目で、いずれも男性の実施頻度が低かった。

3．健康に関する事項（表3）

1）食事摂取時に気をつけている事項

朝食を摂取しようと心がけている者は高校で93.2％であったが、大学になると69.9％と減少し、有意差が見られた（$p<0.01$）。大学で多種類の食品を摂取しようと心がけている者は52.1％、栄養のバランスを考えて摂取しようと心がけている者は58.9％であった。

表2　生活習慣における実施者の状況

n =73

項目	高校時代		大学時代		Wilcoxonの符号付順位和検定	大学の住居区分 自宅(n=29)		自宅外(n=44)		Mann-Whitney のU検定
	人数	（%）	人数	（%）		人数	（%）	人数	（%）	
(1)食事準備等に関する習慣										
食料品の買い物に行く	21	(28.8)	53	(72.6)	**	13	(44.8)	40	(90.9)	**
料理をつくる	20	(27.4)	49	(67.1)	**	9	(31.0)	40	(90.9)	**
配膳等食べる準備をする	63	(86.3)	65	(89.0)		21	(72.4)	44	(100.0)	**
後片付けをする	47	(64.4)	62	(84.9)	**	18	(62.1)	44	(100.0)	**
全く実施しなかった	1		1			1		0		
(2)洗濯に関する習慣										
洗濯機で洗う	38	(52.8)	63	(86.3)	**	19	(65.5)	44	(100.0)	**
手で洗う	22	(30.2)	33	(45.2)	*	9	(31.0)	24	(54.5)	
洗濯物を干す	45	(61.6)	64	(87.6)	**	20	(69.0)	44	(100.0)	**
たたむ	50	(68.5)	64	(87.7)	**	20	(69.0)	44	(100.0)	**
収納する	53	(72.5)	71	(97.2)	**	27	(93.1)	44	(100.0)	
全く実施しなかった	17		2			2		0		
(3)寝具の手入れに関する習慣										
布団を干す	48	(66.7)	57	(78.1)		17	(58.6)	40	(90.9)	*
シーツの交換	44	(60.3)	54	(74.0)		17	(58.6)	37	(84.1)	
全く実施しなかった	17		9			9		0		
(4)掃除の習慣										
自分の部屋の掃除	63	(86.3)	70	(95.9)	**	26	(89.7)	44	(100.0)	**
家人の部屋の掃除	38	(52.1)	26	(35.6)	**	15	(51.7)	11	(25.0)	*
居間・玄関の掃除	31	(42.5)	36	(49.3)		7	(24.1)	29	(65.9)	**
トイレの掃除	12	(16.4)	39	(53.4)	**	2	(6.9)	37	(84.1)	**
風呂場の掃除	17	(23.3)	52	(71.2)		16	(55.2)	36	(81.8)	**
全く実施しなかった	1		0			0		0		

注1）(1)は週1-2回以上、(2)～(4)は月1-2回以上の実施者の合計を表示した。
　　但し、検定は回答された5段階の順位付けによって行った。
注2）＊；p＜0.05、＊＊；p＜0.01
注3）「全くしなかった」者とは、全ての項目について実施しなかった者を示す。

2）実際の食事に関する事項

朝食をいつも摂取していた者は高校で91.8％であったが、大学になって67.1％と減少し、有意差があった（p＜0.01）。朝食をいつも摂取する者は、前述の朝食を摂取しようと心がけている者のうち96.1％であった。
また、住居区分別では自宅生は75.9％、自宅外生は61.4％で有意差はなかった。さらに、間食をいつも摂取する者は、高校で39.7％であったが大学で21.9％と減少し、有意差が見られた（p＜0.05）。一方、昼食をいつも摂取する者は94.5％、夕食は97.3％、夜食は4.1％で、どれも高校の時とほとんど変化がなかった。

朝食摂取の有無と昼食の有無の関係を見たところ、有意差はなかった。夕食、夜食についても同様の結果であった。また、朝食摂取の有無と間食摂取の有無の関係を見たところ、朝食をいつも摂取していない23名のうち22名は間食をいつも摂取していなかった。

大学での食品の摂取状況では、よく緑黄色野菜を食べると回答した者が57.5％と最も多かった。次いで、豆腐・豆類が45.2％、麺類が26.0％、スナック菓子が23.3％、ジュース・コーラが1.9％、インスタント・レトルト食品が17.8％、お酒が8.2％であった。高校でもほぼ同様の割合を示し、高校・大学間での有意差はなかった。

3）喫煙習慣

煙草を吸っていると回答した者はいなかった。

4）体のことで気になる事項

体のことで気になることがあると答えた者は38.4％であった。自由記述の内容をみると、外観的な面に関する内容が6件と最も多く、疲れ易い・倦怠感・体力がない等が5件、アレルギー等が3件、生理不順が3件などで

表3　健康観に関する事項

n=73

項　目	高校 人数	高校 (%)	大学 人数	大学 (%)	χ^2検定
(1)食事摂取時に気をつけている事項					
朝食を摂取しようと心がけている	68	(93.2)	51	(69.9)	**
多種類の食品を摂取しようと心がけている	44	(60.3)	38	(52.1)	
栄養のバランスを考えて摂取しようと心がけている	34	(46.6)	43	(58.9)	
(2)実際の食事摂取に関する事項					
朝食をいつも摂取している	67	(91.8)	49	(67.1)	**
昼食をいつも摂取している	72	(98.6)	69	(94.5)	
夕食をいつも摂取している	72	(98.6)	71	(97.3)	
夜食をいつも摂取している	3	(4.1)	3	(4.1)	
間食をいつも摂取している	29	(39.7)	16	(21.9)	*
緑黄色野菜を多く食べる	43	(58.9)	42	(57.5)	
よく豆腐・豆類を食べる	33	(45.2)	33	(45.2)	
よく麺類を食べる	16	(21.9)	19	(26.0)	
よくｲﾝｽﾀﾝﾄ･ﾚﾄﾙﾄ食品を食べる	11	(15.1)	13	(17.8)	
よくスナック菓子を食べる	19	(26.0)	17	(23.3)	
よくジュース・コーラ類を飲む	16	(21.9)	16	(21.9)	
よくお酒を飲む	2	(2.7)	6	(8.2)	
(3)喫煙習慣	-	-	0	(0.0)	-
(4)体のことで気になることがある	-	-	28	(38.4)	-
(5)健康上気をつけていることがある	-	-	38	(52.1)	-

注1）(1)(2)は重複回答

注2）＊；p＜0.05、＊＊；p＜0.01

あった。その他、睡眠不足2件、朝起きるのが辛い2件、頭痛・肩こり2件、腰痛等2件、便秘2件となっており、歯痛と食欲のありすぎが各1件であった（表4）。

5）健康上気をつけている事項

健康上気をつけていると答えた者は52.1％であった。自由記述の内容をみると、食事に関することが24件と最も多く、次いで適度な運動が14件、十分な睡眠・休息が7件、手洗い・うがい等が2件などであった（表4）。

体のことで気になることがあると答えた者の中で、健康上気をつけている者は91.7％おり、有意差が認められた（p＜0.01）。

4．看護を志向した動機

看護を志向した動機（重複回答）は、「テレビ番組・本・新聞記事」が46名（63.0％）であり、最も多かった。次いで、「自分・家族等の入院」が20名（27.4％）、「看護者の話」が17名（23.3％）、「介護・一日看護体験」が11名（15.1％）であった。一方、「進路相談」と看護を志していなかった」と答えた者は、各8名（11.6％）であった。

表4　健康面で気になること・気をつけていること

（重複回答）

内容	件数
体のことで気になる事項（回答者数　28名）	
1. 外観的気がかり（肥満傾向、毛深い、姿勢の悪さなど）	6
2. 易疲労、倦怠感、体力がないこと	5
3. アレルギー、皮膚症状（手のかぶれ等含む）、アトピー、喘息	3
4. 生理不順	3
5. 睡眠不足	2
6. 低血圧などで朝起きるのが辛い	2
7. 頭痛（後頭部痛と目まい、肩凝りからくる等）、肩凝り	2
8. 腰痛、座骨神経痛	2
9. 便秘	2
10. 歯科（歯痛等）	1
11. 食欲がありすぎること	1
健康上気をつけている事項（回答者数　38名）	
1. 食事の取り方・栄養バランス・低カロリー等	24
2. 適度な運動をする・体力づくり・体力をつける	14
3. 睡眠・休息を十分とる	7
4. 手洗い・うがいをする・風邪の予防	2

Ⅳ　考　　察

1．対象者の基本的属性

本学学生の男女構成は、その比率に差があった。大学入学後の住居については、5割強が下宿生活に移行して

いる。女子の自宅外生の割合は、大阪大学全体で48.6%[7]、全国調査[8]の京阪神地区54.7%との報告と比較すると、大阪大学の平均的傾向よりはやや高く、京阪神地区の全体的傾向に近い。また、高校までの家族形態は、三世代以上が比較的多かった。全国的に1985年から三世代世帯は減少傾向で、1995年の国民生活基礎調査では12.5%であるが[9]、その中でも本学学生の三世代・四世代家族との同居経験は39.7%であり、比較的高齢者と接する機会を有していると推察される。

以上の本学学生の特徴から、性別、住居区分等による影響を考えて生活習慣を分析することとした。

2．生活習慣

生活習慣に関する実施頻度では全く実施しない学生が男性とは限らず、有意差が見られたのは食事準備に関する項目だけであった。これまでは看護学専攻学生には女性が多く、現在も男女比には偏りがあるが、今後、男子学生増加の可能性も予測され、男女の傾向に関する実態調査の蓄積が必要と思われる。

高校時代の結果については、他私立看護大学の報告[5]を見ると、週1～2回以上の料理や配膳等の実施が82.8%、買物が61.8%、後片付けが81.8%とあることから、本学学生の実施頻度は若干低いと思われる。前述大学の月1～2回以上の衣類の洗濯は74.7%、寝具類の交換は80.9%[5]であり、これらの項目に関しても本学での実施の頻度は低い。一方、全く実施しない者の割合では、本学前身の大阪大学医療技術短期大学部での調査結果を見ると、食事準備・片付け1.8%、洗濯26.3%、掃除0%[6]であり、現在の学生と大きな違いはない。つまり、実施しない者の割合の変化は少ないが、実施の頻度は全体に低いことが伺われる。この背景には、他大学に比して男性の割合が若干多いこと、高校時代は勉強等に時間が割かれていたことなどが考えられる。

高校と大学の比較では、生活習慣のほとんどの項目で実施頻度が高くなっていた。この理由については、高校から大学への年齢、社会的変化による生活習慣及び能力の向上を示唆する文献[10),11)]もある。しかし、本調査では、自宅外生の各生活習慣についてのみ高校・大学で有意差が見られた。このことから本学では、以下に述べる大学入学に伴う住居区分の変化の影響が考えられる。

住居区分別では、自宅外生は自宅生と比較して生活習慣のほぼ全項目で実施頻度が高い。又、自宅外生は、多くの項目で一定以上実施している者の割合が高率であった。このことは、自宅外生が世帯的に独立し、実施責任が全面的に自己に委ねられるからである。中でも、食事や洗濯に関する習慣でその傾向が顕著であったのは、生活を維持するためにほぼ毎日行なわねばならないからだと思われる。

高校時代の食事準備に関する習慣は、料理の実施頻度は少ないが配膳等は多いなど、項目によって差が見られた。また、大学の自宅生でも同様の傾向があった。他の調査[5]でも同様の項目間の差があり、全員が生活習慣を一連の過程として経験しているわけではない。

以上をまとめると、本学の学生は、高校時代は家族に依存した生活を過ごし、大学では実家を離れて暮す事によって生活の全てを自分で行っている者と、高校時代と変わらず実家に住み、家族に依存している者がいる。この現状から、教育の場面でも、例えば、生活習慣の援助を準備、実施、後片付けといった一連の過程を総合的に指導する、あるいは学生自身の生活習慣を関連づけて考えさせるといった、ケアする者としての意識付けを行っていく必要性があると思われる。

3．学生の健康問題

学生生活において健康な生活を送ることは、学業を充実させるために重要である。特に看護学生は患者に保健指導をする立場上、健康問題を机上の事とせず、自分自身の問題としてとらえ、振り返ることがその第一歩であると考える。そこで、本調査では学生の健康問題を食事摂取状況と、体のことで気になる事項、健康上気をつけている事項の3点から検討した。

学生の食事摂取状況は、朝食の摂取率が高校から大学入学後に69.9%と顕著に減少していた。大阪大学全体の調査[12]での朝食摂取率78.6%（女子）や、他文献[13]での24歳未満女子の朝食未摂取者が20%との報告と比較すると、本学では朝食を食べない人が多いと言える。また、朝食を食べない学生は補食として間食をとっていることもなかった。また、昼食、夕食はほぼ全員が食べていたが、100%ではなかった。このような朝食の未摂取や食事回数の減少は、本学では学生の住居区分に関連は見られず、学生の健康上問題となる状況であると言える。

朝食を食べない理由や、食事回数が減った理由は今回調査していないのでその要因は明らかにできなかった。しかし、現状の授業は、ほとんど毎日第1時限目より4～5時限目まで連続して行われ、これに出席するためには、学生は早朝に起床して朝食を摂取する生活リズムを獲得する必要がある。医・保健衛生系学生を対象とした福本らの調査[14]では朝食未摂取の理由として「起床が遅く、朝食をとる時間がない」「習慣だから」「夜更かしなどのため起床時に食欲がないから」等をあげ、学生生

活と私生活リズムの食い違いが学生の健康生活を阻害すると報告されている。本学でも、同様の理由が存在すると考えられ、今後、詳細な調査・対応が必要である。

一方、体のことで気になる事項は外観的な面に関る内容など、青年期の特徴が表れていた。その他に「疲れやすい」「朝起きるのが辛い」等の不定愁訴や体調不良がのべ15件あり、事実、授業中に倒れるなどの状況もあった。これらの愁訴や体調不良と食事摂取の関係は本調査では見いだせなかった。短大生を対象とした飯島らの調査[15]では、食事の規則性、毎日の朝食摂取と不定愁訴量の関連を指摘しており、本学でも、食事摂取との関連を再度検討する必要があると考えられる。

健康上気をつけている事項では、食事に関すること、適度な運動、十分な睡眠・休息等、 Breslow の7つのライフスタイル[16]や他文献[17]と類似した内容が見られた。しかし、前述してきた食事摂取や不定愁訴の状況から、自分自身の健康問題を正しくとらえて効果的に対処できているかは疑問である。本調査は基礎看護技術の開始前に行われたため、専門基礎科目で得た知識を自分の生活習慣に応用する力は未だ培われていないと考えられる。しかし、看護専門教育が進行するに従い、獲得した知識を基に生活を改善する力は伸びていくのではないかと予測される。この点については、保健医療に関する専門知識を生活習慣に結びつけて具体化し、自己の生活を振り返る視点を学生に積極的に提示していく教育の必要性が示唆された。さらに、学年が進行するにつれ、演習や実習の授業が増加するが、これらの学習を効果的に行うためにも、学生の健康管理は重要な意味を持っている。特に、学生の半数以上を占める自宅外生の場合は、心身両面での健康問題が生起した場合にも一人で対処するという状態になりかねず、場合によっては、カウンセリングや生活指導などを通じて学生の健康問題に対応する必要があると考える。

なお、喫煙率が今回の調査で0%と言う結果であったことは、自己記名式の質問紙の影響があったと考えられる。

4．看護を志向した動機

学生が看護を志向した動機について、「テレビ番組・本・新聞記事」が最も多かったのは、マスコミの影響が大きい今日の社会背景によるものと考えられる。社会の高齢化や看護不足が問題として取り上げられるに従って、様々なマスコミに流される情報に、学生も着目していると推察される。また、入院経験や看護者の話、一日看護経験等直接自分が受けた体験を通して入学する学生も多くいた。一方、進路指導や看護を志していなかった学生が各1割以上いた。他私立看護大学での看護を学ぶことを決定した理由の調査では、「体験（入院ボランティア）」が12.1%、「他者からのすすめ」が1.0%、「適性検査」が0.2%であった（1989)[18]。調査方法が異なるため単純な比較は困難であるが、本学は自分の体験を通して看護を志向する学生も多い反面、看護単科大学に比べ偏差値による他の学部との併願などによる入学も多いと考えられる。総合大学では単科大学に比べ職業選択に直接結びついたイメージが少なく、看護学志向が強くない学生も入学することがあるためと考えられる。今後、これらの学生の専門教育への動機付けを考慮していく必要が示唆された。

おわりに

本学学生の日常生活経験、健康観、看護を志した動機の実態は、以下の3点に要約できる。

①食事、洗濯、掃除等の生活習慣を実施しているが、他私立看護大学に比較すると頻度が低い。しかし、大学入学後1年6カ月を経過した時点では、学生の6割を占める自宅外生は、非常に高い頻度で実施している。

②健康問題については、外観的な面に関わる内容や不定愁訴が多い。

③看護を志向した動機に、マスコミが大きな影響を与えている。自己の体験に基づいて志望する学生も多い一方、一部には看護学志向が明確ではない学生もいると思われる。

以上の実態の要因については、今回の調査では十分明らかにならなかった。今後はこれらの要因を探るとともに、さらに結果を蓄積し、具体的教育方法を検討していくことが課題である。

引用文献

1）大柴弘子, 原　一寿：現代看護学生の実態と看護技術, 信州大学医療技術短大紀要, 11 (2), 15－17, 1985.
2）野々村典子, 中川克子：学生の日常における生活技術調査, 看護技術, 30 (4), 376－381, 1989.
3）森田チエコ他：看護学生の生活行動能力と看護能力についての研究, 神戸市立看護短大紀要, 6, 31－44, 1987.
4）中村恵子他：看護学生の生活行動と看護能力についての研究－3.過去3か年の入学時, 生活行動調査の結果, 神戸市立看護短大紀要, 11, 11－26, 1992.
5）江田純子他：1994年度本学入学生の入学時における生活経験・学習に関する調査, 聖隷クリストファー看護大学紀要, 3, 93－108, 1995.
6）氏家幸子, 阿曽洋子：看護学生にみる生活関連動作と看護

技術, 看護展望, 10 (5), 483 − 490, 1985.
7) 大阪大学学生部：大阪大学学生の意識と生活, 第18回学生生活調査報告書, 1995.
8) 文部省：大学と生活, 第一法規出版株式会社, 369号, 48 − 49, 1996.
9) 厚生統計協会：国民衛生の動向・厚生の指標, 43 (9), 39 − 40, 1996.
10) 中村恵子他：看護学生の生活行動と看護能力についての研究 − 2.入学時と入学後6か月の変化, 神戸市立看護短大紀要, 5, 15 − 27, 1986.
11) 野村志保子他：本学学生の入学時における生活経験・学習に関する調査, 聖隷クリストファー看護大学紀要, 2, 37 − 54, 1994.
12) 大阪大学生活協同組合：第31回学生の消費生活に関する実態調査, 8 − 28, 1995.
13) 冨田真佐子：若者の健康 − 共同研究「60, 61年度アンケート集計多変量解析結果について」より, 健康管理, 8, 4 − 7, 1992.
14) 飯島久美子他：ライフスタイルの健康影響評価 − 生活習慣, 不定愁訴と精神的健康度との関連性-, 日本公衆衛生雑誌, 35 (10), 573 − 578, 1988.
15) 福本静子他：医・保健衛生系学生の食生活調査（第1報）, 学校保健研究, 22, 46 − 51, 1980.
16) 森本兼曩：ライフスタイルと健康, 公衆衛生, 51 (2), 135 − 143, 1987.
17) 森本兼曩他：健康意識と行動 (1) − 面接による全国調査結果の解析, 公衆衛生, 50 (9), 628 − 636, 1986.
18) 西郷淳子他：本学学生が看護を学ぶことを決定した動機の実態, 聖路加看護大学紀要, 15, 78 − 86, 1989.